

2017年度アクティブ・ラーニング研究会：「聖学院中高におけるアクティブ・ラーニング型授業の開発と21世紀型教育のカリキュラムデザイン」報告（2017年度聖学院大学総合研究所アクティブ・ラーニング研究会主催【FD・SD委員会共催】）

著者	齊藤 伸
雑誌名	聖学院大学総合研究所Newsletter
巻	Vol.27
号	No.2
ページ	68-69
発行年	2018-03
URL	http://doi.org/10.15052/00003394

2017 年度 聖学院大学総合研究所 アクティブ・ラーニング研究会 主催【FD・SD 委員会共催】
 2017 年度 アクティブ・ラーニング研究会
 「聖学院中高におけるアクティブ・ラーニング型授業の開発と
 21 世紀型教育のカリキュラムデザイン」 報告



発題者：児浦良裕先生（上段左）
 開会挨拶：井上兼生研究代表（上段右）
 閉会挨拶：清水均副学長（下段左）

2017年10月23日（月）、聖学院中学・高等学校教諭、児浦良裕先生を講師としてお招きして、アクティブ・ラーニング研究会が開催された。参加者は38名（本学院教員18名、本学院職員12名、外部8名）で盛会であった。研究会の表題は「高校現場発！ AL/PBL開発のヒント」であった。本会は初めに1時間ほどをかけて講演者が聖学院高等学校で実践しているPBL型の授業内容が紹介され、後に30分程度で参加者の全員が実際にAL型授業の課題を体験して、ディスカッションを行った。前半の講演部分では二つの内容が発表され、最初に地域探求型PBL授業の実践報告と、次に本学院の高等学校教諭によって行われているAL型授業デザイン研究の紹介がなされた。ここでは前者に関する講演内容の要旨を報告したい。

聖学院高等学校では「キタ東京プロデューサー講座」というPBL型授業が行われている。それは北東京4区（豊島区、板橋区、北区、荒川区）を2020年にもっとも魅力的にすることを目標として、そのためには何が必要であるのかを考案する授業

である。この企画は、①現状の把握と分析（Reality）、②誰に対してどのような状況を目指すか（Goal Vision）、③最初の一步目の具体化（Next Action）という3つの段階で行われる。講演者によると、大学の学部生が行う同様のPBLにおいては、さまざまなメソッドを用いた調査や分析の知識をもっているため、①に比重が置かれやすい傾向にあるが、もっとも重視されるべきものは②であって、これが明確にされていなければ、適切な③への移行には繋がり得ない。そして授業としてのPBLの成果はアンケートを用いてどのような力が身についたのかを、或る有名企業が掲げる「リーダーシップ」の力と結び付けて振り返らせ、さらに今後身につけるべきものを明確にする。そしてカリキュラムの観点からは、卒業後の大学進学時の姿がいかなるものであるべきかを言語化して明確にすることによって、その都度いかなる力が求められるのか、というビジョンに沿った設計が求められる。

次に、研究会の後半部分で行われたAL型授業体験では、数学Iの授業で統計学の入口と考えられる、「データの分析」が扱われた。その問いは、20人の生徒を二つのグループにわけ、それぞれテストの点数を比較して、平均点では上回るグループ①の生徒よりもグループ②のほうが、学力が高いことを統計的に納得させるというものであった。これにはいくつかの答えが考えられるが、その目的は「統計とは何であるのか」、「統計は何の役に立つのか」という根本的な問いに向けられていて、いったい何のために統計を学ぶのかを生徒が理解するための一助となる。そしてこの授業体験の後には、授業設計の観点からそのプロセスを捉えなおし、それがいかなる教育的価値をもつのかをペア、グループで話し合う時間をもった。そして参加者による発表においては、さらに「他者の考えを聞く」という要素がこれらの活動に付け加えられれば、大学の授業へも応用可能ではないかという意見や、

学問的有用性だけにとどまらず、それを越えた価値の発見に至ることができればさらなる学習につながるのではないかという意見が挙げられた。1時間半という短い時間ではあったが、本学院の大学、高等学校の教職員、そして他の埼玉県内の高校に勤務する教員たちによる集いは、研究会という学び合いの機会だけにとどまらない、高大接続や地域連携といったさらなる可能性を感じさせる貴重な機会となったのではないだろうか。

（文責：齊藤 伸［さいとう・しん］ 聖学院大学基礎総合教育部ポストドクター）